

01・フードコートのいつもの席で、隠れてえつちないとずらされる（えつち絵アカウントがバレたので）

とある年の春。四月二十日、水曜日。十六時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は十五度。

地元民は『すっかり温かくなつた』と感じているが、他の土地の人間は、あまりそうは思わないだろう。

そんな気温の、春の夕方である。

場所は、主人公が通う学校『公立 鶴（くげい）』から徒歩で行けるところにあるショッピングモール『バードモール 鶴中央店』の、Bタウン三階フードコート。

主人公は今、恋人の『桐生 七緒（きりゆう ななお）』を待ちながら、ここで作業をしているのだ。

このフードコートは、公立 鶴の生徒達の憩いの場だ。

毎日放課になると多数の生徒で溢れかえり、主人公もこれまで、幾度となくこの場所

を利用した。

そして七緒や友人たちと、楽しい時間を過ごして来たというわけだ。

だけど、今は一人。

主人公は『いつもの場所』と呼んでいる窓際四人掛けの席で、黙々と絵を描いている。

それは、メッセージアプリの絵文字として販売する予定の、色々な表情をしたアライグマの図案だ。

主人公は、アライグマが笑つたり、感激したり、眠そうにしたりするイラストをちまちまと描きながら……良さそうなものの脇に丸を付けたり、同じデザインにちょっとしたバリエーションを付けて、どちらがよりよいかを精査したりしている。

そうしながら、従業員用ロッカーに忘れ物を取りに行つた七緒を待つているというわけだ。

このように主人公は、手を動かしつつ、脳はそれなりに暇だった。

なので、あたたかな春の日差しを頬に受けながら、七緒と出会つてから今日までの出来事を、しみじみと振り返つてみている。

あたかも少女漫画とか、少女向けアニメとかのオープニングのような一人称で。回想形式で、自分と七緒の事を、楽しく紹介している。

しかし、この行為に特に意味や理由はない。  
オタクとは、えてしてそういう遊びをしたがるものだからだ。

という事で……七緒が来るまで、しばらく主人公の遊びに付き合うとしよう。

わたし、染谷（そめや）あんず。

『公立 鶴（くぐい）』に通う、三年生だ！

趣味はイラストを描く事と漫画を読む事、それからアニメとゲーム。  
あと、最近は料理も頑張ってる。

所属してゐる部活は漫画研究部で、去年の十一月から、部長をやらせてもらつてゐる。  
学校の成績はまあまああってここだけど……二年の頃とつてた選択美術だけは結構褒めて  
もらえた。

つまりこんな感じで、とにかく絵を描く事が好き。

暇さえあれば今みたいに手を動かして、なんか作ろうとしてる。そういうやつなんだ。

そんな、オタク街道まっしぐら。

『このまま一生恋愛経験なしかも』と思われたわたしだつたけど、半年前、ひよんな事  
がきつかけで、ものすごく可愛い彼女ができた。

十月のある日。わたしにはもつたいなさすぎるほどの素敵な女の子が、突然わたしを『好きだ』って言つてくれたんだ。

その子は一見どんな事もサクサクこなしちやう、すごく器用な子だ。

頭もいいし、話してて楽しいし。

仕事もテキパキしてるから、バイト先でもめつちや頼りにされてる。

おまけに見た目もすつごい可愛くて、もはや『鶴の奇跡』と言つて差し支えない。

だからその子をよく知らない人は、彼女を『向かうとこ敵なし』とか『初期ステからぶつ壊れの最強キヤラ』とか『もはや二次元』つて評価してるとと思う。

だけど彼女は、ほんとは人に甘えたり、本音を打ち明けたりつてのがすごく苦手で。

どう見てもかんべき系女子なのに、実は自分に全然自信がなくて。

いつも自分の事をダメな奴つて思い込んでは、自分を傷つけてるつていう……。

本当は、すげえ不器用な女の子だつたんだ。

だからわたしは、彼女のそういう弱い所や、一人で頑張りすぎちやう所を知るうちに、どんどん好きになつちやつて。

今じやもう、完全にめろめろ。

毎日その子の為に、色々頑張つてるつて訳なんだ！

……いうかみなさん、その辺はもうご存知でしたよね。

だつてこれつていわゆる……『これまでのおはなし』つてやつですから……えへへへ。

あつ。でも、みなさんがまだご存知ない事も、実はたくさんあるんです。

具体的には、わたしと彼女が正式にお付き合いを始めてから今日までの、半年間の事！

だからお伝えしますね。

わたしの恋人の『桐生』……改め、『なー』と交際を始めてからの半年間の主なトピックは、こんな感じです！

■お付き合いをきっかけに『桐生』から『なー』つて呼ぶようになりました

■例の『地下駐車場待ち伏せ事件』の翌日。つまり付き合い始めた翌日に、なーのお店のパートさん達にお付き合いバレしました。その後、田中さん呼びに行く時に手繋いでるとこを他のパートさんに見られちゃったみたいですね。なので付き合って即、バアドモール公認カツプルになりました

■パートさん達はみんな知ってるのに学校のみんなが知らないのも変だなって思つて、友達や漫研のみんなにも、すぐに付き合つてる事を言いました。わたし達が仲いい事はとつくに知られてたので、話早かつたです。という事で、交際三日目にして友達と部活公認のカツプルにもなりました

■それから、なーのお母さんが退院して少し経つてから、桐生家にご挨拶に行きました。

その後すぐにうちにも来てもらつて、晴れて親公認カップルにもなりました。あとついでに、前に『すうの家に泊まる』って言つて本当はなーの家に泊まつた事も、お母さんちやんと白状して謝りました

■こんな経緯で、わたしとなーの関係は、速攻でお互いの身内全公認となりました。なので、桐生、久我、染谷、田中の四家は、冬のあいだに交流会しまくつて、ますます仲良くなりました。特にすうんちで合同鍋会とかやつた時は、田中さんの旦那さんと息子さんにもお会いしました

■この四家の交流が始まつた事で、これまで『いつ遊んでんの？』『ていうか寝てんの？』と言われ続けていたなーの生活環境が改善されました。みんなで協力して、なーの負担を減らす事になつたんです。具体的には、なーのお母さんが夜仕事の日には、なーはバイト後、家には帰らずに田中さんにうちかすうの家に送つてもらつて。ご飯食べて、そのまま泊まつてつてもらう事になりました。逆に、週に一回わたしがなーの所へ行つて、ご飯作つてあげて泊まる日も作りました。料理頑張るようになつたのつて、つまりはそういう事なんです。えへ。あと、田中さんは今でも遊園地の件を申し訳なく思つてくれてるのか『どこでも全部送り迎えするから』って言つてくれて、さすがにもちろん全部はお願ひしてないんですけど、田中さんがそのほかの事でもフットワーク軽く色々手伝つてくれるお陰で、四家のお母さん同士もすげえ仲良くなりました

■美津子おばあちゃんとも、その後また偶然会えたので、なーのお母さんが無事退院した

事を報告しました。あと美津子おばあちゃんち、実は割とうちの近所だつたみたいで、今でも時々道やお店で会つてはちよつとお話しする関係になりました。なーといる時にも会つたんですけど、美津子おばあちゃんはちよつと天然なので、わたし達の関係の事は、わかつてゐるのか、わかつてないのか？ つて感じです

■こんな風にほのぼのお付き合いライフが定着してきた冬のある日、わたしがなーの為に作ったメツセ用のスタンプ『アライグマのあーちゃん』シリーズがちよつと売れました。『身内しか買わんだろ』と思つたら、アライグマモチーフのバーチャルヨーチューバー『荒井 ねね』さんが紹介してくれて、局地的に有名になつたんです。これがきっかけで、主にねねさんファンに買つてもらえるようになりました。なお、身内は本当にみんなダウンロードしてくれたみたいで、特になーのお店のパートさんたちのグループメツセは、あーちゃんだらけだそうです

■この件でちよつと自信がついたのもあって、年明けからコミッションサイトで絵の仕事、いわゆる有償依頼つてやつを始めました。オリジナル絵限定なんですけど、わたしがSNSで描いてるむーちゃん絵を見たのがきっかけの方とか、ねねさんきっかけの方とかから、ちよつとずつ依頼もらえるようになつてきてます。今のところ一番大きい仕事は、ねねさんのASMR動画用のイラストです。将来的には、憧れの漫画家・松雪ほたるさんみたいになりたいなあって思いながら、頑張ってます

■付き合つて百日目位の、二月のすごく寒い日に、なーと初えつちしました。一生の思い

出です。最高に幸せでした……♥

■四月上旬、二週間前の『週アル』本誌で、半年近く行方不明だつたわたしの推し、むーちゃんがついに帰つてきました！　すごい元気でした！　なので今は祝い絵描きまくつてます！

■こんな感じで、なーとはめちやめちや順調ですし、推しも元気ですし、イラストレーター的にも一步踏み出せました。うへへへへ。頑張ります

△主人公△

「へへ。えへへへへ……」

主人公、この半年分の出来事を一通り回想したところで、一人ニヘニヘと微笑む。

七緒と交際を始めてから実に色々な事があつたが、どれも幸せな思い出ばかりだ。

特に、交際前からの懸念事項である『七緒忙しすぎ問題』に着手し、身内一同力を合わせて改善に踏み切れた事は本当に良かつた。

結果論ではあるが……これは、早期にパートさん達に二人の関係を知られた事が大きい。

この事がきっかけで、二人は親しい人々全員に関係を打ち明ける事を決意したし、そうした結果、格段に動きやすく、周囲との連携もとりやすくなつたからだ。

という事で今の主人公と七緒は、ちょっと珍しい位、周囲に応援されまくつているカツ

プルだ。

当初は『女の子同士という事をなかなか理解してもらえず、大人の反対を受けたらどうしよう……』と思う事もあった。

だが、性別の件など誰も気にしないほど、七緒の『いつ遊んでんの？』『ていうか寝てんの？』問題は深刻だった。

また、七緒を知る誰もが『なーちゃんマジで異性と恋愛する気がない』事を理解していた。

そこに『なーちゃんをクレーマーから助けた学校の先輩（兼、なーちゃんのスマホを拾つて届けてくれた先輩）』が現れて。

『七緒さんとお付き合いしています。

七緒さんのために、力を尽くしたいです。  
……良かつたら応援して下さい！』

と言つたら……。

七緒の関係者が皆『よし。この子で手を打とう。強めに応援しよう』という雰囲気になつたのも、自然な展開だつたといえるだろう。  
だから、主人公は思う。

……とまあ、こんな感じで、本当に今、わたしすっごく幸せなんです。

仮に。仮にもし問題があるとしても、それは本当に些細な事。

たとえば、身内でわたしが描いたスタンプが流行した事で、イラストを投稿してのSN Sアカウントが、田中さんはじめとするバアドモールのおばさん達にまで知られてしまつた事とか。

その結果、肌色多めの絵や、自分の性癖に関する投稿は、ちょっとできなくなつちやつた事位です。

……でも、大丈夫です！

この件についても、実はほぼ解決済み。

実は半月位前、つまりむーちゃん復活の日から、アダルトめの絵やつぶやきを投稿するアカウントを、こつそり新しく作つて運用し始めたんです！

だから、今はそつちでむーちゃんの新装備絵（公式だけど肌色が多すぎる）とか、むーちゃんの微エロ絵とか、性癖全開のオリジナルえつち漫画とか、習作イラストを投稿しています。

こつちに知り合いはいないけど、だんだん見てくれる人が増えてるんですよ！

だけど、身内といえど『えつち絵用のアカウント作りました』と報告するのはなんか気が引けちゃつて……。

実はまだ、なーにもすうにも話してないんですよ。

『これ、いつ言おつかなあ?』っていうのが、現在の悩みと言えば悩み……って感じです!

【※音声ここから※】

SE1 フードコートの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0—5秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【トラック終了まで流し続ける】

SE2 主人が紙にイラストを描く音

【最初から最後まで流す】

主人公、このように少女漫画のモノローグ風にこれまでの出来事を回想しながら、淡々と手を動かす。

すっかりイラスト制作と回想ごっこに夢中になっているのである。

なので、すでに誰かが隣に座つており、こつそり主人公の作業を見つめている事には、まつたく気付いていない。

だから、主人公は引き続き語る。

とにかく今は、少しでもたくさん絵を描いて、技術向上や、お仕事につなげていきたいと思つてます。

いつも頑張つてる、なーの恋人にふきわしい女性になるためにも。

最低限デート代とかプレゼント代は、自分で稼いだお金から出していきたいですからね。なー。わたし、頑張るからな。

こうやつて少しずつイラストレーターとして身を立てて、将来、必ずなーをお嫁さんにもらうからな……！

と、そのお嫁さん候補がすぐそばにいる事にも気づかず、アライグマを描いている。

そうしてそのまま、さらに二分ほど経過した頃……。

### ●右 3センチ

「くすくす笑いながら、にやにやと、嬉しそうに主人公を呼ぶ。

フードコートの二人掛けの椅子に腰かけ、主人公のすぐ隣にいる。

七緒は、数分前にこの席に到着し、ずっと座っていた。

であるにもかかわらず、主人公がまったく気付かず、ひたすら作業に熱中していた事が面白く、また、可愛くてたまらない。

なので、本当はもう少しこのままで居ようかとも思つたが……今日は珍しく七緒のアルバイト休みの日。

これから七緒の自宅で、二人ゆっくり過ごす予定である。

それでもここに居続けるのは、さすがに時間がもつたいない。

なので、『そろそろいいかな』というタイミングで声をかける】  
せーんぱい】

と、唐突に話しかけられた。

（主人公）

「びやあ！」

驚いた主人公は、椅子に座つたままビヨンとジャンプする。

それから慌てて、声のした方向……七緒の居る方に向き直つた。

これによつて声の方向は『右』から『正面』になる。

●正面 15センチ

「きやつときやと嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。主人公が期待通りのリアクションをしてくれたので」

あはつ♥ すごいびっくりしてる♥

△主人公△

「なー！ い！ い！ い！ いつからいたんだ？！」

主人公、まるで『押されてないと物理的に心臓が飛び出す』と言わんばかりに両手で胸の真ん中を覆うと、心臓をバクバクさせつつも、すぐに身体を戻して七緒のすぐそばに収まる。

交際前の主人公なら、こんな時、驚きすぎて思いつきり距離を取つていた事だろう。でも、今は違う。

今の二人は、沢山の時間を一緒に過ごして、恋人同士の色々な事も経験したラブラブカツプルなのだ。

当然、パーソナルスペースにお互いが思いつきり入り込んでいても、少しも気にならない。それどころか、この方がよりしつくりくる気がする。

逆に言えば、だからこそすぐに気づかなかつたともいえるだろう。

### ●正面 15センチ

「すごく嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。  
主人公が期待通りのリアクションをしてくれたので  
えく？ ずっと居ましたよ？」

〈主人公〉

「ぐ、具体的に、は……？」

だから、主人公が今心配する事があるとしたら。それは、七緒の到着時間と待機時間だ。

この通り主人公は、集中すると周りが見えなくなってしまう。

当然、時計もずっと確認していない。

だから、

あわわわわ……。

も、も、も、もしかすると、三十分とか、一時間とか待たせちゃったんじやないか……？  
今日はせっかくなーい休みで、これからなーんちでいちやいちやする予定だつたのに！  
と、慌てているのだ。

### ●正面 15センチ

「さらっと質問に答える。

できるだけ何でもない事のように言つて、主人公の申し訳ない気持ちを軽減させたいの  
で」  
んう。五分位前から？

しかし、事態はさほど深刻ではないようだ。

七緒はけろりと答えると、スマホを取り出し、その画面を見せて時間を知らせてくれる。  
時刻は十六時十八分。

『ここで待つて下さい』と言われて一度別れたのがちょうど十六時だつた。

これなら確かに、あまり『待たせた』のうちには入らなさそうである。

ちなみに七緒のロック画面は、以前主人公が描いてプレゼントした、七緒の推しキャラクター『鏡（かがみ）セーラ』のイラストだ。

ちなみにスマホケースも一見おしゃれだが、実はこれも『セーラちゃんのスマホケース』という公式オタクグッズである。

主人公の恋人は、堂々としたオタクなのだつた。

（主人公）

「わわわ！ マジか！

ごめん。全然気づいてなかつた……！」

……話がそれた。

とにかくこれで、さほど七緒を待たせずに済んだ事はわかつた。

それでも、主人公は申し訳ない。

こうなるのは、すでに一度や二度ではない。

その上、毎回深く反省して、自分なりに対策しているのにもかかわらず……。まだ改善に至つていなかつた。

### ●正面 15センチ

「嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。慌てふためく主人公が可愛らしいので。

全く怒っていない。

七緒は主人公の、絵を描き始めると集中しすぎてしまうところも大好きなので。

『別世界行っちゃう』とは『近くにいても、まるで別世界にいるかのよう』に、まったくこちらのアクションに気づかないほど集中している』という意味』

あは♥ やっぱり気づいてなかつたんですね。

先輩って、集中するとほんと別世界行っちゃいますもんね♥』

△主人公△

「うう……。ほんとごめんな。

そうなんだよ。わたしつてほんと、絵描いてるとつい周りが見えなくなっちゃうつてい  
うか……」

だけど、七緒はまったく気にしていないようだ。

前々から思っていた事だが、主人公の恋人は、主人公にとことん甘い。

主人公がどんなミスやマヌケなしくじりをしても、いつも優しく笑つて受け止めてくれ  
るのだ。

だから主人公はいつも、

はあ……。なー、優しい……。  
しゆき。だいちゆき……。

と、ぱーっと胸が一杯になつてしまふのである。

### ●正面 15センチ

「嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。  
全く怒つていなーい。

七緒は主人公の、絵を描き始めると集中しすぎてしまふところも大好きなので】  
ふふ。大丈夫ですよ♥

私、絵描いてる先輩見てるの大好きですから。  
【自然に話題を変え、謝る。

これ以上主人公に謝らせたくないし、そもそも、こうなつたのは自分が主人公を待たせ  
たからなので】

私こそ、お待たせしちゃつてごめんなさい】

△主人公△

「あ！ そうだ！ 時計あつたか？」

だがそんな、ぼんやりが服を着ているような主人公でも、ようやく今日ここに来た理由を思い出す。

自分達は今日、七緒の時計を探しにやつてきたのだ。

### ●正面 15センチ

「穏やかに嬉しそうに。即座に自分の事を心配してくれる主人公がいとおしいので。腕時計を見せながら話している」

はい。やつぱり時計、ロツカーの中にありました。

この度はお騒がせしました♥」

〈主人公〉

「あー！ やつぱりかあ。あつて良かつたな！  
ずっと使つてる大事な奴だもんな！  
……あ。じやあ、そろそろ行くか？  
せつかくの休みなんだし。なーも早く家に帰つて休みたいだろ」

主人公、ホツと胸を撫でおろすと、手をグーにして振りながら七緒に提案する。

ところで『アライグマのあーちゃん』は、主人公がアライグマに似ている事から生まれた。

具体的にはこの、何をするにも手が上がり下がったり。

顔に当たり胸に当たり、閉じたり開いたり。広げたり縮こまつたりと、何かと手の仕草に落ち着きがなく。要するに『手がうるさい』事から『なんだかアライグマっぽい』と言われるようになつたのだった。

### ●正面 15センチ

「落ち着いて。

『特に自分は急いでいないので、主人公の裁量に任せることを伝える。

もし主人公の作業が順調なら、ここで無理に止めるのは申し訳ないのであ。いいですよ。

せっかく作業されてたんですし、キリいいとここまで進めて下さい。

【主人公が今描いていたイラストについて尋ねる。

紙に描かれているのは『アライグマのあーちゃん』の絵なので、おそらく新作スタンプか絵文字だろうとは思う。

だが、そのどちらであるかまでは判別がつかないので一何（なん）の絵描かれてたんですか？

△主人公△

「えっとな。今度出す絵文字の図案考えてた！」

主人公、一度机に向き直ると、イラストを描いていた紙を七緒に渡す。

これによつて、顔を動かしていない七緒は、そのまま主人公の右耳に話しかける形になる。

声の方向が『正面』から『右』になる。

S E 3　主人公がイラストを描いた紙を七緒に差し出す音  
【最初から最後まで流す】

●右 15センチ

「とてもテンションが上がり、嬉しそうに。

『頭部だけのイラストばかりなので、もしかすると絵文字なのではないか』という予想が当たつたので

お？」

△主人公

「こんな感じ。普段よく使つてゐる絵文字を参考にしつつ。

みなさんからリクエストがあつたやつを、重点的に揃えてみました」

七緒、興奮して距離が近づく。

●右 3センチ

「「とてもテンションが上がり、嬉しそうに。

主人公が見せてくれた新作イラストが、とてもハイクオリティかつ自分好みなので。

また、先日自分がリクエストした絵文字を、主人公が律義に全部考えていてくれたので。

そして、照れつつも得意げにイラストを見せてくれた主人公がとても可愛らしいので】

※大きい声になりすぎないようにお願ひします

えつ。めっちゃ良（い）いー！

私がお願ひした奴全部あるー！

【嬉しそうに。】

主人公がこれまで販売したメツセージアプリ用のスタンプについて語る。

それらはどれも好評で、周囲の人間は『主人公が描いたから』というひいき目は多少あ

りつつも、みんな気に入つて使つて いるので。

その例として、由希乃の存在とその使用頻度の高さをあげる  
先輩の作るスタンプ、皆（みんな）名作すぎ。

田中さんとか押しまくつて ますよ」

（主人公）

「えへへへへ……。

割と作業順調だからさ、この感じなら、今月末には申請できると思う」

主人公、胸の前で自分の指先同士をくつつけると、五組すべてをつんつんと合わせ、照  
れたポーズをとる。

無意識のリアクションなのだが、やはりちょっと手がうるさい。

●右 3センチ

「「とてもテンションが上がり、嬉しそうに。予想以上に早く絵文字が仕上がりそうなので」

※大きい声になりすぎないようにお願いします

えつ。じゃあ来月には使えそうなんですか？  
わー。楽しみです♥」

七緒、興奮してさらに近づく。

●右 0センチ

「あまあまに。

主人公は何も言わない。だが、本当は『スタンプに続いて、今度は絵文字が欲しい』と言った七緒のために急ピッチで作業してくれている事を、七緒は薄々理解しているので】  
流石（さすが）先輩」

七緒、右耳にささやく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「[ひそひそと、あまあまにささやく]  
だーい好き♥」※

（主人公）

「…………！」

七緒、少し離れて、主人公の顔を正面から見て話す。

●右 15センチ

「【ちよっとコミカルに。『キリツ』とふざけて、うやうやしく。  
まるで『大作家先生と、先生の作品を隣で待つ編集者』のような感じで】  
じやあ、私は描くとこ見てるんで。どうぞ続きして下さい」

〈主人公〉

「あっ……♥

でも、今日は案出しだけにしどこうと思つてたから大丈夫だよ」

主人公、耳元で『流石』『大好き』などの甘い言葉をささやかれ、再び

はわわ……。

なーのあまあまボイス、最高……。

中身がよくて顔もよくて。スタイルも良ければ声も覇権の恋人、やば……。  
SSRなんてもんじやないよ……。

と、脳が溶けそうになるも、慌てて己の意見を伝える。

そう、七緒と来たら、最近えらくASMР的な事に力を入れているのだ。

確かに以前から『やたら近い距離感で話す』傾向はあつた。

だがこのところはそれに加えて、こんな風に距離に緩急をつけて話したり、不意にあまりに囁いてきたり、キスしてきたり……舐めてきたり。

そのようにして主人公の耳を、めちゃくちやに惑わせにきている気がする。

それは、自分の声がえらく良いと、ようやく自覚したからなのかも知れない。

あるいは先日、アニメ版でむーちゃん役を演じている声優さんが音声作品を出し、それにすっかり夢中の主人公を見て、自分も色々試してみたくなったのかもしれない。

とにかく主人公は、七緒のこの『ASMР攻撃』にめっぽう弱い。

ただすぐそばで七緒が話しているだけなのに……じゅわっと、身体の芯が熱く湿つてくれるような感覚に襲われてしまう。

ありていに言えば……。

ちよつと。

ちよつとだけいやらしい気分になつてきた……。

△主人公△

「と、という事で。今日はこの位にしどくから。行こうぜ？」

だから主人公は、内心どきまぎしつつ『早く桐生家でゆっくりしよう』と、積極的に促す。

絵の仕事は大切だが、七緒と過ごす時間はもつと大切だ。

それに、たった今のこれで、色々とスイッチが入りかけている。

一刻も早く七緒の部屋に行つて、いやいやしたくなってきたのである。

### ●右 15センチ

「きよとんとして。

だが実際は、自分が耳元でひそひそ話したあたりから、主人公が何だか足のあいだをもぞもぞさせて、恥ずかしそうにしているのに気づいている

あ、そうですか?」

（主人公）

「……うん！ 残りは明日やるよー

そんな主人公に、七緒が再び近づく。

七緒は、主人公の興奮をすでに見抜いている。

●右 3センチ

「『かなり近づきつつ、まるで『右15センチから全く動いていない』かのよう』に、しつつと続ける。

主人公がそれだけで『びくつ』と身体を震わせた事には気づいている】  
なら、ここ出る前に、先輩にお聞きしたい事があつたんです】

△主人公△

「……！ ……うん！ なんだ？」

七緒、主人公の右耳に唇を近づけたまま、スマホを取り出して続ける。

●右 3センチ

「[しれっと切り出す】

この作家さんの、このイラストなんんですけど。ちょっと見てほしいんですよ】

△主人公△

「？ うん。いいぞ。見せて見せて」

？ 何だろう。『このイラストで使われてる技法って何ですか？』的な質問かな？

主人公、きよとんとしつつ、また、両足を落ち着きなくぶらぶらさせながら答える。  
うるさいのは手だけのはずだったのだが、七緒がこんな風にむやみやたらに近くで話しかけて来るから、足までうるさくなってしまったのだ。

### ●右 3センチ

「【穩やかに落ち着いて】  
ありがとうございます。

【『キヤブション』と言いたいが、その言葉が出てこない。  
なので、近い意味合いの言葉『一言』『紹介文』で代用しようとする】  
えっとですね。この。

何（なん）て言うんでしたっけ。

イラストについてる。一言？ 紹介文？

「主人公」

「キヤブション？」

主人公、七緒が言わんとするところを推測して答える。  
すると七緒が、興奮して、さらに近づく。

●右 0 センチ

「テンションが上がる。

主人公に答えを教えてもらえたので、頭のもやが晴れた気分。

また、すぐに正しい答えを導き出してくれる、知的な主人公の事を『さすが先輩♥』  
『さすが先輩♥』と思っている】

そう ♥ キヤブション！

キヤブションをちょっとと読んでほしいんです。

【主人公に自分のスマホを手渡す】

はい。どうぞ】

△主人公△

「ん？ わかった。えーっと」

かくして主人公は、言われるままに応じ、スマホを受け取った。

その頭の大半は『早くなーんち行つていちやいちやしたい。あわよくば、なーのお母さんが帰つてくる七時ごろまでに、めつちやえつちな事がしたい』という事で占められており、まるでまともな思考ができていない。

だから主人公は、すっかり忘れていた。

自分の新アカウントは、最近ちよつとえつちなむーちゃん絵を投稿しまくった事によりプチバズを繰り返しており、フォロワー増加中な事。

つまり、むーちゃんの正式名称『六車（むぐるま）あゆむ』でパブリックサーカスすれば『話題の投稿』として、すぐ出てくる存在になつてている。という事を。

〈主人公〉

「……！」

それだけではない。

そのアカウントにはむーちゃん以外のイラストも載せており、中には、七緒を意識して描いたオリジナルイラストもある事も、主人公は失念していた。

しかし、直接『その画面』を見せられたのなら、話は別だ。

今まさにそうされた主人公は、

——あつ。

……しまつた……。

と凍り付き……。そのまま、言葉を失つた。

七緒、主人公の横顔を、ちらりと覗き見る。  
これによつて、少しだけ離れる。

●右 3センチ

「にやにやと嬉しそうに。

主人公が画面を見て、露骨にフリーズしているのが可愛くて仕方ないので  
あ。わかつちやいました?」

その絵は、アカウント内の他のイラストとは違ひ、安心の健全絵だ。

七緒つぽい女の子を、色々なポーズ、表情、角度で描いているだけの、モノクロの練習  
つぽい絵だ。先ほど言つた『習作』の一つである。

また、七緒つぽいと言つても『釣り目の、一癖ありそうな雰囲気の、十代後半の美少女』  
という点が同じなだけだ。

だから知り合いが見ても『もしかするとこの絵は、七緒を参考にしているのかも知れない』と思う程度の作品である。

髪形や身体的特徴はきちんと変えているし、そこに主人公の絵柄によるアレンジも加わり、まず特定はできないようになっている。

なので、はたから見れば、特にまずいイラストではない。

だが、当の七緒に見つかると、ものすごく恥ずかしいイラストではあった。  
その理由は――――――。

右 3 センチ

「にやにやと嬉しそうに。

自分の推理を述べる。

主人公が画面を見て、露骨にフリーズしているのが可愛くて仕方ないのでこれ。アカウント違いますけど。先輩の絵ですよね？

【少し間をあけてから。】

## 『それでー』の略】

で  
一  
。

【スマホの画面を指さして。】

疑問形ではあるが、答えを確信している。

『このイラストに描かれているのは、私ではありませんか？』と、完全に確信した上で質問している

描いてあるのって、もしかして私？ ですよね♥』

〈主人公〉

「……あ、あ、あ。

え、え、え、えーっと。

なつ、七緒さんはどちらでこのイラストを……？

主人公、もはやキャプションを読むどころではなくなり、どもりまくりながら、質問に質問で返す。

だが、問題はそのキャプションにあった。

イラストに添えた短い言葉に、主人公の恥ずかしい本音が詰まっているからだ。

●右 3センチ

「「しつと、嬉しそうに、このアカウントを知った経緯を説明する。

主人公が状況を理解できず、完全に固まっているので。

『六車あゆむ』は主人公の推しキヤラクター『むーちゃん』の正式名称。

『パブサ』は『パブリックサークル』の略】

あーごめんなさい。

昨日『六車（むぐるま）あゆむ』でパブサしてたら、

【画面を切り替えて、同じアカウントに投稿された、別のイラストを見せながら】  
こっちの。この絵が出てきたんですよ。

で『え？ これ先輩の絵に似てない？』と思つて他のも見たら、完全一致なんですもん。  
だから確認したかったです。

【『むーちゃん』とは『六車あゆむ』の愛称】

先輩と絵がそつくりな、むーちゃん推しの、私っぽい女の子も描いちやう人。

そんなの先輩しかありえないですもんね♥

△主人公△

「あのっ。あのっ。あの……。この件につきましては、ほんと、その……」

主人公、七緒と目も合わせられず、ほっぺたを両手で覆う。  
そして、真っ青になつたかと思えば真っ赤になつて。

言い訳の言葉も出さずに、

終わつた。なーに、なーっぽい女の子の絵を見られちまつた。

終わつた……。

ああ。終わつた……。

と、頭の中で、壊れた機械のように繰り返す。

こんな事になるなら『誰も自分の事知らないアカウントって、なーんかのびのびできていいなあ！』などと思わず、アカウント開設時に素直に理由を説明して。

『これからえっち絵はこっちに載せるから、教えとくな』と、七緒や涼羽にURLを送ればよかつた。

『なーみみたいな女の子を描いた。しかも、我ながらメツチヤ可愛く描けた。誰かに見せたいけど、本人に見せるのは恥ずかしい。でも、投稿しないのはもつたいない。だから、こっちのアカウントでこつそり載せとこ』なんて思わず『なーっぽい女の子描いた！見えて！』と、本人に正直に言えればよかつた。

でも、主人公はちょっと『匂わせ』がしたかったのだ。

『恋人に微妙に似ているイラストを描いて、知り合いのフォロワーがないアカウントに投稿する』などという『果たしてそれは匂わせなのか?』という程度の、ずいぶんと腰の引けた匂わせをして。

自分の恋人が死ぬほど可愛い事を、全世界に発信したつもりになつて。  
一人ニヤニヤしたかったのだ。

しかしその強欲さが、この恥ずかしすぎる結果を招いてしまつた。  
恥ずかしい……あまりにも恥ずかしい。

対する七緒は、主人公の顔を覗き込む。

すっかり顔を真っ白にして、自分と目も合わせられずにいる主人公を、じいっと見つめる。  
すると、主人公が向き直つた。

これによつて声の方向が『右』から『正面』になる。

### ●正面 15センチ

「いつものトーンで穏やかに。  
全く怒つていない。こうなつた経緯は、想像に易いので。

であるにもかかわらず、主人公がものすごく申し訳なさそうにして、さつきから真っ青になつたり真っ赤になつたり、言い訳の言葉さえ失つたりしているので『可愛いなあ』と思つてゐる。

なのでひとまず、自分の推察を述べる】

ううん。大体経緯（いきさつ）はわかりますよ。

【『アカウント』とは『主人公が普段イラストや日常について投稿しているSNSアカウント』という意味】

うちのパートさん達、先輩の事好きすぎて、先輩が絵描いてる事どころか、アカウントまで知つてゐるし。

【『むーちゃんは、デザインからしてセクシーで肌の露出が多い。』

そのため、公式に忠実に描くたけでも、なんだかえっちな印象になつてしまふ』という意味で言つてゐる】

でも、むーちゃんつてセクシー担当だから、素で露出多いですし。

【『むーちゃん絵』は『むーちゃんのイラスト』。

『えっち絵』は『アダルトなイラスト』という意味。

『アカ』は、以降すべて『アカウント』の略】

だから先輩は『むーちゃん絵やえっち絵は、パートさん達も知つてゐるアカには載せない方がいいな』って思つて、新しいアカ作つたんですね？

で。 そうするうちにフオロワー増えて。

【『この絵』とは『七緒をモデルにした女性の絵』の事。

『健全絵』は『誰が見ても問題ない、全年齢対象のイラスト』という意味。

『新アカ』は『新しいアカウント』の略

この絵みたいな健全絵も、新（しん）アカにあげるようになっちゃったと。

【にやにやと嬉しそうに。正解であると確信しているので。

『私はこんなに主人公の事を理解しているんですよ』とアピールしたい】  
当たりでしょ？』

（主人公）

「はい……。すべて、なー様のおっしゃる通りです……」

……ん？

あれ？ あれ？ あれ？

……なー、怒つてないのか？

……なんで？

主人公、ガタガタと震えながら、ブルブルと混乱しながら、裁きの時を待つ。

しかし、なぜかはよくわからないが、七緒はどうやら怒っていないようだ。

だが、もし逆の立場だったら、主人公は何となく淋しい気持ちになつていただろう。

『なんで教えてくれなかつたんだろう。わたしとなの仲なのに』と、なんだかシユンとした事だろう。

だから、その一点のみにおいても、七緒は怒つたり拗ねたりしていいし、逆に主人公は猛省、猛謝罪しなくてはならないと思うのだが……。

### ●正面 15セント

「『いつものトーンで穏やかに。」

過去形なので、全く淋しがつていない。淋しさを払拭する出来事があつたので。

『見てない絵』とは『自分がこれまで存在を知らなかつた主人公の絵』という意味だからね。

最初は彼女として、先輩のファンとして、ちよつと淋しかつたつていうか。

『見てない絵こんなにあつたんだ！』つて、ちよつとショックではあつたんですけど

そう思つていると、早速その点について言及があつた。

これによつて主人公の胸はチクチクと痛むが、まだ話には続きがあるようだ。

●正面 15センチ

「嬉しそうに。特に『いいかな♥』の部分を嬉しそうに強調して。  
それ位心弾む事が、キヤブションには書かれていたので】  
このキヤブション見たら『いいかな♥』つて♥  
だつて」

七緒、近づく。

主人公の右耳に唇を寄せて、ささやく。  
これによつて声の方向が『正面』から『右』になる。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく  
「ひそひそと。

少し恥ずかしそうに。でも嬉しくてたまらない様子で、あまあまにささやく。

スマホの画面を最初のものに戻して、主人公の画面を見せながら、すでに暗記済みのキヤブションの文言を読み上げている

『好みのタイプの女の子描きました』つて書いてくれたから♥』※

〈主人公〉

「……！」

七緒、そのまま主人公の右耳にキスする。

●右 0 センチ

「右耳に軽くキスする。

嬉しくて、勢い余っている】

ちゅ 

【少し間をあけてから。

少し照れた、でもすごく嬉しそうな様子で】

ありがとうございます 

すごい嬉しかったです】

七緒、主人公の右耳に唇を寄せて、ささやく。

★右 ささやき 0 センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと。

少し恥ずかしそうに。でも嬉しくてたまらない様子で、あまあまにささやく】

先輩。だーい好き♥」※

「主人公」

「はわわわわ……」

やば……やば……やば……♥

主人公、七緒の甘いささやきに、いよいよ昇天しそうになる。

つま先にぎゅっと力を入れてなんとかこの世にとどまつたが、鼓動はますます早くなり、  
もはやいやらしい事しか考えられなくなりそうだ。

だが、それはいけない。

主人公はまだ謝罪らしい謝罪を済ませていないし、第一ここはフードコートなのだ。

七緒とだけじやなくて、涼羽や由希乃、美津子とも過ごして来た……超の付く『思い出  
の、公共の場所』なのだ。

とにかく、とにかく、まず……！

謝らないと！

なので主人公は、七緒に向き直り真剣に謝る。

これによつて声の方向が『右』から『正面』になる。

〈主人公〉

「……ありがとう。喜んでくれて嬉しいよ！

……でも、やつぱりよくなかったよな。

自分なりに、なーがモデルだとはわからないようにアレンジしたつもりだけど。

やつぱ見る人が見たらわかつちやうし。

そもそも、無許可で描くのはダメだよな。

アカウントの事隠してただけじゃなく、なーっぽい子のイラストまで描いて。

こんな事して、本当にごめん」

主人公、ここで一度深々と頭を下げたのち、『イラストは消すから……』と続けようと口を開く。

しかし、七緒は本当に気にしていないようだ。

それどころか少し慌てた様子で、頭を上げるよう促してくる。

七緒、自分も少し姿勢を低くして、主人公と目線を合わせる。

それから、主人公の両手首を握つて自分の方を向かせ、優しく諭すように話し始める。

### ●正面 15センチ

「穏やかに優しく。

このイラストについて、七緒は何の問題視もしていない事と、その根拠を述べる。  
というか七緒は『些細な秘密についてしつこく責める』なんて、かつて秘密主義で知られた自分ができる事ではとてもない。と、思っているので

え？ 謝る事ないですってば。

【アカウントの存在を隠していた事について言つてている】

単に言う機会がなかつただけでしょ？

【『七緒っぽいと言えば七緒っぽい女性のイラスト』について言つてている】

この絵だつてほくろとか髪型とか、私とは大分（たいぶ）変えてるし。  
知り合いが見なきや、私がモデルつてわかんないですよ。

【少しだけ甘えた声で、拗ねた様子で。】

主人公があまりにも申し訳なさそうにしているので、可愛くて、からかいたくなつたの  
で

まあ確かに『教えてくれたつていいのに』とはよつと思いましたけど……」

！ やっぱり淋しい気持ちにさせてた！  
わたしつてば、なんてダメな彼女なんだ……！

主人公、その言葉にガーンと衝撃を受け、再び思いつきり頭を下げる、猛烈な勢いで謝罪の言葉を述べる。

〈主人公〉

「そうだよな！ わたしがなーの立場でもそう思うよ。

本当にごめんな。なーの言う通り、話すタイミングなくしちやつてただけなんだけど。  
それでも、いい気持ちじやないよな。

我ながら可愛く描けたから、勿体なくなつちやつて。

つい出来心で投稿しちやつたんだよ。本当にごめん。

……だけど、そんな感じだから、このアカの事はマジで誰にも言つてないんだ。  
もちろんすうとかも知らないぞ！

……とにかく。ほんつとにごめん。

このお詫びっていうか、埋め合わせは必ずするから！

そうだ。半年前、主人公は『この人を絶対に幸せにする』という強い決意のもと、七緒

と交際を始め、今日に至る。

なのに、今回はそれに反する事をしてしまった気がする。

だから主人公はとにかく、とにかく謝りたかった。

もしこの罪を今から挽回できるなら、なんだつてしよう。そんな気分になつていたのだ。

### ●正面 15センチ

「嬉しそうに。

もちろん、埋め合わせしてもらうつもりはない。それには及ばないので。

だが、主人公がこんなにも真剣にこの件を捉えて、誠実な対応をしてくれた事自体は、  
とても嬉しいので

えー？ 埋め合わせしてくれるんですか？

【穏やかに優しく。そんな主人公の人柄が好きだなあと思ったので】

ふふ。いいのにそんなの♥

〔甘くからかう。〕

七緒自身は『この程度の事、特に謝る必要はない』と思つてゐる。

しかし、主人公の性格上、何かお詫びをしないと気が済まないだろうと気づいたので

先輩かわいー♥

でも、折角（せつかく）ですから、お言葉に甘えちゃおうかなあ？」

△主人公△

「おうおう。何でもさせてくれ。

セーラちゃん絵の百枚ノックでもいいぞ！」

主人公、前のめりで頷くと、ぶんぶんとファイティングポーズを取る。

百枚はちよつと時間がかかりそうだが……七緒の気が済むなら、その位喜んで書かせて  
いただくつもりである。  
だが……。

### ●正面 15センチ

「ちよつとぎよつとして。

まさか、主人公がそんな事を言い出すとは思わなかつたので。

本音を言えば七緒にとつて『セーラちゃん絵の百枚ノック』は非常に魅力的である。  
しかし『さすがに罪に対する罰が重すぎるだろう』と思い、やめておく

お詫びの絵？

「ちよつとコミカルに。『うーんうーん』とうなつて。

『実に悩ましい。主人公のイラストのファンとしてはぜひイラストを描いてほしい。だ

が、それは罰として適切ではない』という事を強調して、辞退する

んー。それはすつごい魅力的ですけど。

そこまでしてもらつちやうのはなあ……。

【少し間をあけてから。

ふと思いついたように、嬉しそうに。

『実質お詫びにはならないお詫び』を思いつく。

どのみち今日は、これからセツクスするつもりだったので】

あ♥

じやあ。おしおきしたいです♥】

△主人公△

「……えつ……♥」

しかし、主人公の刑罰は、ここで唐突に決定した。

しかも『おしおき』という言葉を用いている割には、ずいぶんと甘い響きをもつて。

△主人公△

「……？」

七緒、目を細めて主人公を見やる。  
正面から捉えられた主人公はドキッとして、まるで蛇に睨まれた蛙みたいに動けなくなる。

しかし、これも妙なたとえだ。

動物にたとえるなら、主人公は森のゆかいなおともだち系アライグマで、七緒はそこに舞い降りた、美しき白鳥のような存在なのに。

⋮⋮でも、蛇にたとえるのもアリかもしれない。

七緒は蛇顔ではないが、身体が細くしなやかな所とか、ちょっと執念深い所や、ミステリアスな雰囲気があつて『蛇っぽい』ともいえる。

そうだ。ヘビ七緒になら、カエル主人公は食べられてもいい⋮⋮。

などと考へてみると、七緒がまた主人公の右耳に唇を近づけてくる。

ひそひそ話をする必要なんてまったくないはずなのに、わざとそうしてくる。

**SE 4** 七緒が、主人公に密着する音

【最初から最後まで流す】

七緒、主人公の右耳にささやく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく  
「ひそひそと、ゆっくりと。

主人公がこんな風に『えつちな事をされながら、それを言葉でいやらしく解説されるチュエーション』が大好きな事を知っているので。

この状況を楽しみつつ、最大限主人公の耳を楽しませ、ドキドキさせようとしている】  
こんな風に横からくっついて。

おっぱいと太もも。先輩にぴったり押しつけて」※

S E 5 七緒が、主人公の内腿を触る音

【最初から最後まで流す】

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく  
「ひそひそと、ゆっくりと。

主人公の右の太もの内側を、いやらしく触りながら話している。

主人公がこんな風に『えつちな事をされながら、それを言葉でいやらしく解説されるチュエーション』が大好きな事を知っているので。

この状況を楽しみつつ、最大限主人公の耳を楽しませ、ドキドキさせようとしている  
こんな風に内腿（うちもも）、さわさわしながら……。  
先輩の大好きな』※

七緒、主人公の右耳を舐める。

☆右 舐める 0センチ

「不意打ちで、でも優しく舐める。

右耳の穴の入り口に舌を挿入し、小さく動かすイメージ】  
ぴちゃつ……♥ ちゅぶつ。ぴちゃつ……♥

【ゆっくりと、ねつとりとした動きで、音を立てて舐め、それから舌を離す。  
露骨にいやらしい音を立てる事で、主人公をドキドキさせようとしている】  
れーろつ ♥】

（主人公）

「！」

七緒、主人公が露骨にびくつ♥としたのもかまわず、続けて右耳にささやく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「くすくす笑って。しれっと。

まるで耳舐めしていた瞬間などなかつたかのよう、言葉を続ける

お耳べろべろしてあげるんです♥

それで。先輩が

【『嘘喘ぎ』する。

わざとらしく、いかにも作り物じみた喘ぎ声を出す】

『あつあつ♥ あつあつ♥』

【しれっと元の話し方に戻る】

つて恥ずかしい声出して。

『やめて』つてお願ひしても絶対やめてあげない、  
【ゆつくりと。ひときわいやらしく、ねつとりと。

主人公が最近この『快楽漬け』という言葉をとても気に入っていて、強い反応を示す事を知っているので】

快楽漬（づ）けえっち。

してあげたいなあ……♥

ふふふふ♥』※

〈主人公〉

「あつあつ。  
あ」

……もうダメだ。

ドキドキしそぎて、座席から見える景色がぐるぐる回転して見える。主人公の頭は、完全におかしくなってしまった。

〔主人公〕

「な、なー……

ここ、どこだと思つてゐんだよ……  
フードコートだぞ……

そんな事言つて。誰かに聞かれたらどうするんだよ……  
〔〕

主人公、足をそもそもさせながら、慌てて注意する。

だが、声はあからさまに嬉しそうに震えており、落ち着きは完全にゼロ。おまけに、はあはあと甘い呼吸を漏らしているものだから、まるで説得力がない。

●右 0センチ

「あまあまに優しく。『そんなの気にしなくて大丈夫ですよ』という感じで

んー?

大丈夫。誰にも聞こえませんよ。

他の人からはね。

女の子が二人。ベタベタしてるようにしか見えません♪

でもね?」

七緒、主人公の右耳にささやく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと嬉しそうに。

一見『妙に距離の近い友人同士』にしか見えない自分達の実態を述べ、主人公を興奮させようとしている

ほんとの私達は毎日やらしい事してて変態カツブルで。

先輩は私にいじめられるのが大好きなドMさん♥

いけない事して。これからおしおきされちゃうっていうのに。  
もうこんなに期待して。

『今日はどんな事されちゃうんだろー』って、はあはあ興奮しちやつてるんですもん』

〈主人公〉

「あ……。あつ……あつ……。

それはつ……



●右 3センチ

「くすくすと嬉しそうに】  
違います？」

主人公、恥ずかしすぎて、期待しすぎて、荒い息で目を潤ませる。

それを、横から七緒がニヤニヤ見つめている。

これだけで想像力豊かな主人公は、今日これから自分達を想像した。

それは、自分が七緒にめちゃくちゃに犯される未来だ。

容赦なく、初手から完全に封じられて。

なすすべもなく喘ぎながら、何度も何度も絶頂させられる未来だ。

……そんなものの、一刻も早く迎えたいに決まっている……。

だから、今すぐ七緒の家に行つて、続きをしてほしい。  
もう、それ以外の事なんて、一つも考えられない。

だから、主人公は……黙つて首を振る。

●右 3センチ

「くすくすと嬉しそうに」

ふふ。違わないんだ♥

先輩は素直で、とつても悪い子ですね♥

じやあ、ほんとはこのまま触つてあげたい位なんですが……

七緒、さらに近づく。

すでにとつくなツクアウトされている主人公を、なお攻める。

●右 0センチ

「あまあまにわざとらしく、残念そうに」

ここじやあ無理ですから」

七緒、主人公の右耳にささやく。

その時紡がれた一言で……主人公の理性は、形を保つていられないほどにとろけた。

★右 ささやき 〇センチ ※マークのセリフまでささやく

「[ひとりきわいやらしく、あまあまに、わざとらしく。

主人公をめちゃくちゃや期待させたいので】

うち帰つて。しましょつか……♥」※

ここでフェードアウトして終了。